八　離反にて

「編集長。僕はできません」
　翌日、坂本は出社すると同時に、編集長の机にまっすぐに向かった。
「できないって、何が？」編集長は俯いたまま、パソコンの画面に向かってブラインドタッチで指を動かしている。次の企画書だろうか。
「宮本さんと別れることです。彼には大変お世話になりました。今さら、彼を刀で切るわけにはいきません」
　編集長が顔を上げ、眼鏡越しに坂本をゆっくりと見た。公園の地面に降りたった鳩が何かを見ているような感情がない顔だ。
「それじゃあ、あたしがあなたを切るわ。もう、あしたから会社に来なくていいわ」
　坂本の顔は豆腐が瞬間に冷凍したかのようにこわばった。返す言葉が見つからない。
「じゃあ。あたしは今。忙しいから、話はこれくらいにして」編集長はそう言い終えると、再び、机の上のパソコンの画面を見遣った。
「失礼します」坂本は吐き出したいような唾を飲み込むようにして足早に事務所から出て行った。
「編集長。あんなこと言っていいんですか。坂本はこの会社を辞める気ですよ」
　副編集長の遠藤は編集長の顔色を伺いながら、とりあえず事務的に坂本を心配する振りをした。
「心配しなくてもいいわ。あたしなんか、何回、この会社をやめたことかしら。すぐに気が変わって、戻ってくるわ」
　編集長は額と目尻と鼻の下に皺を作りながら、「うんんん、面白くないわ」と両指を組むと事務所の天井に届くくらいに背伸びをした。
「まあ、そうですね。私も三回、この会社をやめてやると出て行きました」遠藤も地雷を踏まないように言葉を選びながら追随する。
「そうよ。それで帰って来ないようならば、この業界にはいられないわ。あーあ。お腹空いた。飴でも舐めよっと」
　編集長は椅子から立ち上がり、窓辺に置いてあるお菓子入れの中から飴を一つ掴み、口の中に放り込んだ。その視線の先には、肩をいからし、足早で歩く坂本の後ろ姿があった。

「どうでした？」
　隼人は店の支払いを済ませ、ドアを開けた後で、優子に振り向いた。今日は、優子との初デート。地域雑誌が主催の婚活イベントで知り合い、意気投合したのだ。特に、婚活イベントでは、落武者姿のきもいキャラが出てきて、その着ぐるみが矢を放ってから、どういう訳か、急に、二人の間が盛り上がったのだ。
　その場で、次のデートの日程を決め、映画を観た後、食事に誘ったのだった。特に、食事をした店は、１週間前からインターネットをサーフィンし、デートで使う名店リストの中から、一番高

い評価の店を選び、予約しておいた。
「美味しかったわ。ありがとう。よくこの店、知っていたのね」
　優子は隼人に微笑み、隼人の左肩に並んだ。
「いやあ。優子ちゃんのためにちょっと調べただけさ」
　隼人は少し自慢そうにしなが、左手を伸ばす。優子の右手を握ろうとしたその瞬間。
「別れさせて御免」と大きな怒鳴り声が聞こえるとともに、何かが二人の間の空気を切り裂いた。何が起こったのかわからずに、その場で時が止まったかのようにポカンと立ち尽くす二人。目の前には、ざんばら髪の落武者。あの婚活パーティーに出演していたきもいキャラだ。落武者は刀を鞘に戻すと、わざわざ二人の間を悠然と通り過ぎて行く。慌てて避ける二人。
「ごめん。あたし、急に用を思い出したの。帰るわ」
　隼人を置き去りにしたまま、優子は大股で歩いて行く。
「ああ。そう。俺も用があったんだ」
　隼人も踵に力を入れてきびすを返すと、優子と反対の方向に歩いて行った。
　隼人と別れた優子は思う。
「なんで、あたし、あんな人とデートしたんだろう。確かに、婚活イベントでは盛り上がったみたいだけど、つきあうほどの人じゃなかったのに。一緒に見た映画は面白くなく、センスが疑われるわ。食事中の会話だってネタが少なかったし、食事の支払いだって割引券かなにかを使っていたようだし、あんがいケチな性格かもしれない。食事をおごってもらったけれど、無駄に時間を過ごしたのは事実よ。早く別れてよかった。あしたも仕事があるから、早く帰って寝よう」
　隼人は暗い夜道を歩きながら思う。
「なんで、あんな娘を誘ったんだろう？あいそもないし、そんなに美人でもない。婚活パーティーの時は素敵に見えたし、相手も自分に気があると思っていたけど、そんなのこちらから願い下げだ。むこうから先に帰ったから、かえってよかった。あとくされがなくていい。食事代は二人分いったけど、投資と思えば安いもんだ。さっきは、気兼ねしてお酒を控えていたから、さあ、家に帰って、ビールを飲みなおそう。悪い思い出もビールと一緒に流してしまおう」

　坂本の電話が鳴り響く。着信履歴を見る。編集長からだ。坂本は編集長と喧嘩して、三日間、会社を休んでいた。宮本さんのことを謝ってもらわないと絶対に会社には行かないぞ。宮本はしぶしぶと電話に出た。

「あなた一体、何をしてくれたの。いくら自分の思い通りにならないからと言って、あの落武者を使って、婚活イベントで出来たカップルを別れさせるなんて、卑怯よ。あなたがそんなひどいいやがらせをするとは思わなかったわ」
　こちらに口をはさまさないくらいの勢いで編集長が口撃してくる。こういう時は黙っているに限る。特に、相手は編集長。相手の性格は前からわかっている。しばらくして、相手が疲れて言葉が途切れ出したのを見計らって、坂本はおもむろにしゃべりだした。
「編集長。何を言っているのか、僕にはわかりません。なんで、僕が、婚活イベントで出来たカップルを別れさせなければならないんですか。それに、別れさせるって、どうやって別れさせる

んです。後でも着けて行って、石を投げたり、髪の毛に髪終えたガムを引っつけたり、ベンチに押しピンでも置くといういやがらせでもするんですか。大人の僕が、そんな子どもじみたことをする訳がないじゃないですか」
　宮本も相手に負けないくらいの勢いで、憤慨しながら切り返した。
「そうよ。そのいやがらせよ。あなたは十分子どもよ。自分の意見が通らないからと言って、会社に来ようともしないじゃない。大の大人はそんなことしないわ。自分でやっておいて、よくも、しらじらしく言えるわね。ちゃんと証拠があるのよ」
　編集長は小猫の首根っこを掴んだかのように自慢そうに言った。
「証拠？」宮本は頭を巡らすものの、思い当たる節はない。
「そうよ。証拠よ。婚活イベントの参加者から会社に電話が相次いでいるのよ。変な落武者が現れて、「別れさせて御免」って叫んで、刀みたいなもので、二人を切りつけるらしいのよ。離れているから怪我はしないものの、その武者が刀を振り回した後で、相手の事が急に冷めて、つきあいをやめるらしいの。なんで、イベントの時は、あんな人とつきあおうと思ったのかわからないけれど、今となっては別れてよかったと感謝してくれたわ。感謝されるのはいいことだけど、結婚については十分考えます、当分の間は婚活イベントには参加しません、との返事よ。これじゃあ、あたしたちの婚活イベント事業はやっていけないわ。そうなると、会社だってつぶれるかもしれない。そうなったら、あなたたちの責任だから」
　再び、編集長の一人舞台だ。般若の舞だ。口をはさむ隙はない。一方的な言いがかりに怒りをこらえながら、通話口からやや耳を遠ざける坂本。ようやく、相手の舞が終わりを告げようとしたので
「すいませんが、宮本さんはここ数日間、僕と一緒で外に出歩いていません。カップルに斬りかかるようなことはできません」
「そんなこと言って、信じられると思っているの。どうせ、あなたがその落武者にやらしているんでしょう。あなたもグルじゃない。そんな仲間から、家から一歩も出ていないと言ったって信じられる訳はないでしょう」
「僕がそんなこと宮本さんにはやらせません。そんなに暇じゃありませんよ」
「会社を休んでいるじゃない。暇じゃない。暇にまかせて、私への、会社へのあてつけでやっているんでしょう」
「とにかく、そんなことはやっていません。とにかく、もう電話を切りますよ」
「逃げる気ね。これ以上、続けるのだったら、警察や裁判所に訴えるわよ。いいわね」
　坂本よりも先に編集長が電話を切った。少しでもの意趣返しか。プープープーと乾いた通話音だけが鳴り響く。
「どうしたでござるか？」宮本が心配そうな顔で坂本を見つめる。
「うん。編集長からだけど」と、電話の内容を手短に宮本に話す。
「なんで、僕たちがカップルの間を切り裂かないといけないんだ。それに、宮本さんが、カップルの前に立って刀を振りまわすんだ。それも「別れさせて御免」と叫びながらだって。今時、辻斬りじゃあるまいし。濡れ衣もいいところだよ。宮本さんなら矢を使うはずだよ。それに、ここ

数日間、僕とずっと一緒だったから、そんなことはできないはずだよ。僕は信じているよ。編集長は悪夢でも見ているんじゃないの。会社の経営が上手くいっていないから、僕たちのせいにしているんだろう。もう、相手に何かしないよ」
　しゃべればしゃべりほど、編集長の言い分に腹が立ってくる。怒りは６秒で収まるんじゃなく、反対に、一分、十分と時間が長くなればなるほど増幅していくものなんだ。坂本の話を口をむの字にして黙って聞いていた宮本がぽつりと呟いた。
「佐々木のせいでござるな」
「佐々木？」坂本が聞き返した。
「そう。佐々木小五郎でござる」
「あの、宮本武蔵と戦った佐々木小次郎？」
「いえ。小次郎のいとこの小五郎でござる」
「宮本さんも武蔵のいとこでしょう？」
「そうでござる。武蔵と小次郎のように、拙者と小五郎も戦ったのでござる」
「その佐々木小五郎が、今も、生きているの？戦国時代の話でしょう」
「拙者も生きているでござる。小五郎も拙者と同じように石化していたのでござる。これまでも、何回か、石から人間に戻り、戦ってきたでござる。今回も、また、拙者のように人間に戻ったのでござろう」宮本が正座をしたまま、目を開けた。
「ええ。それじゃあ、二人は永遠のライバルなんだ」坂本は目をオセロか碁のように白黒を反転させながら、宮本の話に聞き入る。
「いいえ。拙者は小五郎を敵とは思っていないでござる。もう昔の話でござる。出会うたびに戦いはやめようと言っているのでござるが、小五郎はやめようとしないのでござる」その時、あの穏やかな宮本の顔が暗くなった。
「じゃあ、カップルの前に現れたのは、その佐々木小五郎なんだ。だから、宮本さんと同じ武士の姿をしているんだ。でも、なんで、カップルの間を引き裂くの？何か恨みでもあるの？人が仲良くしている姿が気にいらないの？」
「拙者にもわからないでござる。カップルには恨みがないと思うでござる。恨みがあるのは拙者に対してでござろう。どこかで拙者のことを聞きつけて、邪魔をしているのと拙者をおびき出そうとしているのでござろう。小五郎の考えそうなことでござる」
　怒りをこらえてか、正座している宮本の両拳と両膝が震えている。
「そうか。それなら、話のつじつまが合うね。編集長の言いがかりも事実の事なんだ」坂本は謎が解けたので、編集長に対する怒りは少しはおさまった。
「こうしてはいられないでござる」宮本が正座からすくっと立ち上がった。刀は腰に差していない。
「どこへ行くの」坂本も慌てて立ち上がる。
「小五郎を説得して、やめさせるでござる」
「えっ。戦わないの？」
「戦いも終わらさないといけないでござる」と言う間もなく、裸足で玄関から飛び出した。
「ちょっと待ってよ。僕も一緒に行くよ」坂本はランニングシューズのかかとを踏みつけながら

、風のように走って行く宮本の背中を崩れたスキップのような走り方で追った。